

米家志乃布 著

『近世蝦夷地の地域情報 日本北方地図史再考』

法政大学出版局 2021年5月 266頁 2,900円
+税

著者の米家志乃布氏は、幕末から明治期にかけての「蝦夷地」と「日本」における鯨肥料や石炭などの商品流通の構造を、歴史地理学的な視点からアプローチしてきたことで知られている。その著者が、本書をまとめることになったのは、あとがきにもあるように、「日本北方地域の地図史を扱ううちに、「実態」としての蝦夷地ではなく、「表象」としての蝦夷地に学問的な興味関心が移ってきました。和人の地理的認識としての蝦夷地がどのように地図・絵図などの画像史料に表象されているのか、その意味は何なのか、という学問的な問い」(249頁)だという。

この目的意識のもと、本書は二部九章で構成されている。

まず、目次を示すことにしよう。

はじめに

第一部 日本の歴史空間と「蝦夷地」

第一章 ヨーロッパおよびロシアの地図にみる
蝦夷地像

第二章 日本図からみる蝦夷地像の変遷

第三章 日本図・蝦夷図にみる庶民の蝦夷地像

第二部 「蝦夷地／北海道」における地域情報の
収集と表象

第四章 日本における蝦夷図作製と地域情報

第五章 松前藩・江差沖の口役所収集の絵図に
みる地域情報の把握

第六章 東北諸藩の蝦夷地沿岸警備と地域情報
の収集

第七章 松浦武四郎による地域情報の収集とア
イヌ民族

第八章 目賀田帯刀の風景画にみる蝦夷地／北
海道像

第九章 植民都市・札幌の風景と植民地として
の北海道像

おわりに―日本北方地図史を再考する

この構成をみた段階で、あることに気づかされた。誤解を恐れずにいうならば、すでに人文地理

学会の2017年大会特別研究発表時¹⁾には、著者の頭のなかにこの書の構成はできあがっていたのではないかということである。新稿とされる、はじめに、第四章、第八章以外はすべて2001年から2017年までの論稿からなっていることから裏付けられるが、どうであろうか。この推測が正しいければ、それから約3年半の歳月を経て、本書が生み出されたことになる。

以下では、各章の概要を述べ、続いて問題点や疑問点などを提示することで、書評の一文としたい。

「はじめに」では、日本北方地域を対象とした地図作製史の研究課題として、「地図に表現された蝦夷地像と日本の歴史空間との関係はどのようなものだったのか」、「幕府が直接に蝦夷地を支配した時期(幕府直轄期)以降に行われた地域情報の収集によって、どのような「蝦夷地／北海道」像が生み出されたのか」(16～17頁)との二つの課題が提示されている。これへの著者の回答は、本書の第一部と第二部において展開されるが、これは「「蝦夷地」という異域が日本の国土に編入され、新たな国土空間が生み出されていく過程」(19頁)の解明だという。

第一章では、秋月俊幸氏をはじめとする先行研究に基づき、ヨーロッパおよびロシアによって作製された日本北辺の地図から、蝦夷地の変遷の様相をたどり、地理的知識獲得の様相についてふれている。

続く第二章では、近世に作製された日本図(その中心は刊行された日本図)から、蝦夷地がどのように日本の国土に組み込まれていったのかに分析が及んでいる。

同章では「近世日本は、地図印刷技術の発達によって、民間刊行の地図が数多く発行された時代である。幕末には、それら民間発行の地図は庶民レベルまで普及するようになった」(65頁)としているが、評者はそうは考えない。三都の本屋組合の設立や、各種の刊行物の流れ、従来の地図史が明らかにしてきたことから判断しても、17世紀末から18世紀初頭がその画期だと考えるからである。実際、本章の「三 近世における刊行日本図と蝦夷地」において、著者は寛文2年(1662)刊記の「新改日本大絵図」から繙いて、蝦夷地の記載内容を分析していることからすれば、それは

相違を容れないであろう。

また地図の読解について、疑問がない訳でもない。例えば69頁に、「一方、一八世紀半ばに出版された同じ石川流宣による「大日本国大絵図」(宝暦三(一七五三)年、表2-62)および「日本海山潮陸図」(元禄四(一六九一)年)に描かれた「夷狄」と「松前」は、陸続きに地図の北東の端に描かれている(図15)」とする。しかし、図15の「新板 日本国大絵図」は、後に林氏吉永が「延享改正」との刊記を有する「新板 日本国大絵図」の原図と目されるものであり、文中に用いた元禄4年図²⁾を用いるのが望ましいと考える。となると、表2には目録番号として「25」地図の名称「日本大絵図(仮)」を追加するべきであろう。なお、著者は表2や文中において、「夷狄」と読んでいるが、「安永改正大日本画図」(図16)を除いて、正しくは「夷狄」である。

さらに70頁に、「安永八(一七七九)年の「改正日本輿地路程全図」(表2-83)、寛政三(一七九一)年の「改正日本輿地路程全図」(表2-95)などを見ると、「松前」城下の記号が記され、その周辺に地名がいくつか書き込まれ、渡島半島の南端部分のみが描かれている(図17)」と指摘を行い、71頁の図17には、「改正日本輿地路程全図」部分(寛政3(1791)年)を掲げている。しかし、下北半島が「とび口」の形態を用いていることから判断するに、安永8年刊記の「改正日本輿地路程全図」であることは明白である³⁾。本書の表2でいえば、目録番号83が該当する。ちなみに、著者が取り上げている赤水日本図の安永版と寛政版では、蝦夷地の様相に若干の相違がみられることを付記しておく。

第三章では、江戸時代の庶民層の多くが目にするのができた刊行図(一枚物の刊行地図、節用集付録の地図)をもとに、需要側の蝦夷地像を想像することに重点をおいて論じられる。前章を補強するために、設けた一章であろう。著者はそこに「幕府知識人層と庶民層との地理的認識の違いについて言及」(79頁)することを目論んでいる。しかし、「幕府知識人層」の地理的認識に言及されているかといえば、評者はそれを見出すことはできなかった。冒頭にふれている「伊能図」が幕府知識人層の蝦夷地の地理的認識を指しているであろうが、「伊能図」を知識人層の代表する蝦

夷地像であるという論拠は示されていない。マクロなスケールになるが、伊能図よりも広く目にふれたであろう、文化6年(1809)6月高橋景保識の「新鑄総界全図」「日本辺界略図」、文化7年3月高橋景保識「新訂萬国全図」⁴⁾などを掲げて検討する必要がなかったであろうか。さらには、幕府撰天保「松前国絵図」についての言及も欲しかったところである。

刊行図をもとに、製作者の意図、換言すれば地理的知識を見出すこと、需要層の地理的知識の形成を読み解くことは可能かもしれない。しかし、知識人層と庶民層の地理的認識の違いを刊行図のみで見出すことは至難の技でもある。階層ごとの地理的知識の違いを読み解くためには、やはり丹念に個人の随筆や記録から読み取ることが欠かせないと評者は考える。でなければ、著者が記すように「想像すること」に限られてしまうだろう。

第四章は、先行研究において紹介されている日本で作製された主要な北方図を概観し、各著作の論点を整理することで、第二部への展望をまとめている。展望されるのは、小縮尺や中縮尺の図ではなく、ミクロなスケールの蝦夷地沿岸の地域図(絵図や風景画)に焦点をあて、「地域情報収集と地図情報の機能を、政治的なコンテキストに位置づけて明らかにすること」(108頁)である。これは、以下の第五章から第九章の課題設定でもあり、「はじめに」でふれている二つめの課題ということになるだろうか。

ここで研究史の整理、問題点を提起することで、第二部への展望とする著者の意図は理解できなくてもない。しかし、研究史の整理ならば、第一部の冒頭に置いて整理することで、以後の各章への導入がスムーズに図れたのではないと思われる。

第五章では、これまで積極的な検討がなされなかった「江差沖ノ口備付西蝦夷地御場所絵図」に描かれた情報をもとに、政治権力による地域把握の手段を見出そうとしている。分析対象とするのは、25葉の前述した絵図であり、著者は「幕府役人にとっては支配領域把握の一手段として、江差沖の口の商人たちにとっては、経済活動を展開するための基礎資料のひとつとして機能していたのではない」か(141頁)と位置づけている。さらに、蝦夷地にとっての幕末とは「地図なき時代」から「地図を必要とする時代」への転換期であっ

たともする(同頁)。確かに、蝦夷地の植民地化政策を進めていくうえでは、地図は必要不可欠なアイテムであっただろう。

また、第六章では、幕末に蝦夷地を領有した秋田藩と盛岡藩に遺された絵図「マシケ御陣屋御任地面境内略図」と風景画『東蝦夷地海岸図台帳』に描かれた内容や表現の特徴から、その作製主体や目的を検討することで、蝦夷地沿岸の地域情報の収集について論じている。ここでは前記したように、秋田藩の事例として図37「マシケ御陣屋御任地面境内略図」(146頁)を掲げているが、前章で「江差沖ノ口備付西蝦夷地御場所絵図」を用いて「運上家」「土人小屋」の具体相が読み取れたように、大きな図版を用いての説明が必要ではなかっただろうか。というのは、キーワードでもある「朱引」がどこに図示されているのか、判読できないためである。

第七章では、法政大学国際日本学研究所が所蔵する松浦武四郎が著した『天塩日記』を素材として、天塩川流域の地域情報のなかに、アイヌの人びとの地域認識が記録されているかを確認する作業がなされている。著者も述べるように「アイヌの人びとの地域認識を再び拾い出し、彼らが自分たちの生活圏でどのような空間の情報をもっていたのかを考察すること」(196頁)は、蝦夷地誌の全体像を把握する意味でも意義あることだと思われる。幸いに、天明期以降注目を集めてきた蝦夷地に関しては、『加摸西葛杜加国風説考(赤蝦夷風説考)』をはじめとして、多くの地誌や日記が編まれている。これらの比較検討もあわせて行えば、より意義深い内容になったものと思う。その意味では、著者が注で掲げた「幕末蝦夷地におけるアイヌ女性—松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』を事例として」⁵⁾を補論として盛り込んでも良かったのかもしれない。

第八章では、安政3年(1856)から安政6年にかけて、蝦夷地調査の幕命をうけた目賀田帯刀の描いた風景画『北海道歴検図』(北海道大学蔵)をもとに、幕府役人の作製した風景画が蝦夷地の表象に果たした意義を考察し、同風景画が地域情報把握というコンテキストにおいて、大縮尺図と同様の役割を果たしたものと推測している。確かに、著者が推測するように絵図と地図が融合していた時代は、地域情報を目の当たりにできる風景

画(真景)の持つ意味は大きかったであろう。首肯できる指摘でもある。この目賀田の風景画は、国学者前田健助による『蝦夷志料』の編纂と関係があるとされる。となると、完成なった『蝦夷志料』(国立公文書館蔵)との関連はどうなっているのだろうか。評者はこの点についても興味が惹かれた。そこに踏み込んでこそ、目賀田の实地調査の意義もみえてくるものと考えからである。

第九章では、船越長善の作とされる「明治六年札幌市街之真景」をテキストに、風景写真・写真帖といった視覚資料を加えて、その「風景」を分析することで、内陸部に進出した和人の植民地としての北海道像を明らかにし、同図を「真景図」の政治的な利用の伝統を引き継いだものと位置づけている。

筆者が例示したように、写真資料を景観読解の一ツールとして役立てることは、今までなかった訳ではない。写真資料からは、実態を的確に把握できるという利点が多いが、本書で示されたように、文献史料などと併せて活用することで、より詳細な景観把握が可能となるものと思われる。

「おわりに」では、二部の5章にわたる各論考をもとに、「日本の「国土」は、地図を製作することで空間的に拡大していくだけでなく、領域内の地域情報を収集し表象することによって深化した。近世蝦夷地という「異域」は、和人がその地域情報を表象することにより、日本の「国土」となった」(245頁)と結論づけている。ある意味では、和人にとって未知の土地=テラ・インコグニタの克服は18世紀末からの北方史の潮流でもあっただろう。ただし、第七章で著者がふれているように、蝦夷の人々も空間認識を持っていたことは留意しておく必要がある⁶⁾。

本書の魅力の一つは、地図や絵画資料を豊富に用い、それらを読み解く作業によって、蝦夷地の地理知識、地理情報がいかにして把握されていったかに迫ったことであろう。

丹念な著者の読み込みによって、その試みの多くは成功しているものと考えられる。しかし、以下に掲げるように、図に対して十分な理解がなされていない点や、誤読などがあるのは、残念な点でもある。本書が再版される際には、是非修正を施すことをお願いしておきたい。

例えば、64頁では「安政六年に出版された『東

西蝦夷地山川地理取調図』をもとに、江戸時代末には「官板実測日本図」(木版)の「蝦夷諸島」「北蝦夷」が発行された」としているが、同頁の上段に置かれた図13は、幕末に刊行された開成所版ではなく、明治3年(1870)に大学南校から再版された「官板実測日本地図」の「蝦夷諸島」図である。

また、70頁では「なおこの描き方は、多くの赤水日本図に共通して見られ、嘉永五(一八五二)年の「増訂大日本国郡輿地路程全図 全」にも同様な描き方が確認できる」としているが、同図を引くのであれば、正確には「赤水日本図の系譜を引く日本図」とするべきであろう。

さらに71頁には、「増訂 大日本輿地全図」を引用して、「蝦夷カラフト紙中狭キガ故爰ニ略ス」とあるのは「故爰ニ略ス」、72頁に「大日本海陸全図」の蝦夷地に関する注記を「蝦夷地八大方ノ縮図ニシテ度数ニ因サレハ狭ク地名モ猶少シトイヘトモ紙中限アレハ略ス」とあるが、正しくは「紙中限アレハ略之」である。このほか、90頁にある『大日本図鑑』は『新撰大日本図鑑』であろうし、93頁の「蝦夷国図」(図23参照)は「蝦夷全図」と読める。

第六章での分析に用いられた盛岡藩に遺された絵図は、157頁では「もりおか歴史文化館所蔵の『東蝦夷地海岸之図』」とあるが、164頁や165頁の図版では(『東蝦夷地海岸図台帳』もりおか歴史博物館所蔵)と記している。どちらが正しいであろうか。

このほか、些細なことではあるが、第九章における和暦(西暦)表記についても、整理されるべきであろうし、第一章のタイトルが目次(iv頁)と本文(25頁)で異にしていることも指摘しておきたい。さらに、注で引用している秋岡武次郎『日本地図史』の引用頁は、著者が示す河出書房発行ではなく、平成9年(1997)ミュージアム図書編集の復刊本の頁数であるので、77頁の注(25)にそれを明記するべきであろう。

思いつくままに、筆を走らせてきたために、評

者の誤読や言が過ぎた点もあるかもしれない。この点については、ご寛恕をお願いしたい。

かつて蝦夷地・北海道地図史に関する著書としては、著者も研究史を整理するなかで掲げているように、船越昭生『北方図の歴史』(講談社、1976)をはじめ、高倉新一郎編著『北海道古地図集成』(北海道出版企画センター、1987)、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』(北海道大学出版会、1999)、高木崇世芝『近世日本の北方図研究』(北海道出版企画センター、2011)が知られていた。日本の北方地域に視点を注いできた著者による本書も、このなかの一冊に加えたい。あわせて、北方地図史研究を繙く研究者諸氏や学生には是非一読を勧めたい。

(小野田一幸)

〔注〕

- 1) 「米家志乃布(法政大学):日本の歴史空間と「蝦夷地」像」人文地理70-1, 2018, 136-140頁。
- 2) 流宣日本図の大型版の初版としては、元禄3年刊記の現存が確認されている。
- 3) 海田俊一『流宣図と赤水図—江戸時代のベストセラー日本地図—』アルス・メディアカ、2017。
- 4) 実際に刊行されたのは、文化13年頃とされる。
- 5) 大口勇次郎編『女の社会史 17-20世紀「家」とジェンダーを考える』山川出版社、2001, 224-242頁。
- 6) 松浦武四郎が著した『蝦夷漫画』(安政己未新梓)には、「蝦夷の国のかたち」として、挿図を掲げ、「此国人いまた文字またハ筆墨紙等無か故に、何事にせよ、指もて砂場また爐中の灰に画して人に示す、其わさ女夷とも等のかた長せりとかや」とみえる。ここに確認できるのは、「できすぎた」蝦夷地の形態ではあるが、空間を認知していたと理解してよいだろう。